

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：24506

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05640・19K20845

研究課題名(和文)ニューギニア紛争後社会における未来と感情の動態に関する人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological study of future and emotional dynamics in post-conflict society in New Guinea

研究代表者

深川 宏樹 (FUKAGAWA, Hiroki)

兵庫県立大学・環境人間学部・准教授

研究者番号：00821927

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、これまで申請者がパプアニューギニアで研究してきた紛争の処理と「感情の調停」という枠組みを、大規模紛争後社会へと展開するうえで、新たに未来志向のアプローチを導入し、いかに人々が大規模紛争により生じる憤りや死別の悲しみと向きあい、新たな制度や関係を生成させるかを解明し、理論化する。紛争処理では、単に問題となる人々の行動が法的な観点から裁かれるだけでなく、紛争後に持続する「感情がいかにとりあつかわれるか」、すなわち、いかに紛争の「感情が調停」されるかが、決定的に重要である。本研究は、紛争後社会の未来と「感情の調停」に関する一般理論の構築を目指すことで、紛争処理研究の進展を促すものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大規模紛争によって生じた悲哀や憤怒の感情は、長期間持続し、容易には解消できない。それゆえ、過去志向の立場から紛争の「解決」を目指す限り、過去の束縛からは逃れられない。本研究は、凄惨な経験や感情に新たな意味を与え、未来へと向けて新たな制度を創出するなかで、人々が紛争の感情を霧散させるのではなく、それらの感情と「うまく向き合う/つきあっていく」論理を丹念に拾いあげるものである。従って、本研究は従来の紛争・感情研究に新たな視点を加え、さらに人々の共存・共在に向けた具体的な道筋を示す点で、学術的にも社会的にも貢献しうる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to develop the framework of conflict resolution and "mediation of emotions" that I have studied in Papua New Guinea into a large-scale post-conflict society. I introduced a future-oriented approach to elucidate how people face the sadness of resentment and bereavement caused by large-scale conflicts, and create new customs and relationships.

This study investigated how emotions of sadness and resentment are treated in post-conflict society in Papua New Guinea, and how those emotions recreate the method of conflict mediation. In addition, how do the survivors deal with grief in the event of unexpected casualties? Also, how does the traditional method of mourning (funerals, etc.) work, and how does it change? I clarified these points.

Anthropological research dealing with conflicts and their processing were structural and norm-centered analyses. They have overlooked emotional issues. Research of emotion and future has not yet been accumulated.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学 紛争処理 感情 社会性 パプアニューギニア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

パプアニューギニアのブーゲンビル州では、1989年に鉱山開発をめぐって反政府軍と政府軍の紛争が生じた。紛争は泥沼化し、島民同士の暴力の応酬、村落の襲撃、レイプ、隣人の殺害をも引き起こした。1998年の停戦まで、島民の約1割(15,000人)が命を落とし、大半のインフラ、病院、家屋や財が破壊された。こうした惨状下、軋轢を抱えた者たちが相互に隔絶することなく、「共に在る」ことはいかにして可能か。これが、本研究開始当初の背景をなす学術的な問いである。

人類学の紛争とその処理を扱う研究は、生態学的アプローチから社会構造論、法人類学まで蓄積が厚い。しかし、それらの先行研究は、構造や規範中心の分析だけでは説明できない感情の問題を見落してきた。紛争研究では、いかに紛争で怒りが生じ、鎮静化するかを解明することは、長らく最も重大な課題とされてきたが、未だ研究が蓄積されていないのが現状であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまで筆者が、パプアニューギニアで研究してきた紛争の処理と「感情の調停」という枠組みを、大規模紛争後社会へと展開するうえで、新たに未来志向のアプローチを導入し、いかに人々が大規模紛争により生じる憤りや死別の悲しみと向きあい、新たな制度や関係を生成させるかを解明し、理論化することにある。

この点を追求するため、大規模紛争を経験した同国ブーゲンビル州を対象に、国家主導の追悼式典とそれに対する人々の反応や、紛争に起因する同州の分離独立の動きを民族間の対立感情との関連から解明する。次に現在進行中の紛争調停で、被害者の遺族が抱える悲哀や憤りがどう扱われ、それらの感情が紛争調停の方式をいかに創り変えるかを調査する。また想定外の死傷者が出た状況下、親族を喪った者たちは死別の感情といかに向きあうのか、そこで伝統的な弔いの方法(葬儀等)はいかにほどに機能し、どれほど変容せざるをえないのかを問う。これらをふまえ、紛争後社会の未来と「感情の調停」に関する一般理論の構築を目指す。

3. 研究の方法

筆者はこれまでパプアニューギニア・エンガ州の事例から、紛争処理を「感情の調停」という独自の視点から分析してきた。具体的には、クラン(氏族)内外の紛争を対象とし、その処理方法である仲裁や村落裁判における個人の怒りの制御や抑圧、ならびにその解消過程を記述・分析した。感情の扱い方がそれぞれ異なる制度に着目することで、本来、主観的で捉えがたい感情を、観察可能な次元で対象化し、それらの制度の比較から感情の現れ方や変容過程を浮き彫りにすることができた。それによって、対立や軋轢を必ずしも完全否定しない共在の論理を、実証的に検証することが可能となった。

より詳細には、筆者はこれまで、パプアニューギニア高地エンガ州ワペナマンダ地方を中心にフィールドワークを実施し、下記の(1)紛争のなかで生成する感情の社会的・文化的構築、(2)紛争の処理と「感情の調停」、という2つの問題について研究を行ってきた。

(1) 紛争のなかで生成する感情の社会的・文化的構築

博士論文の研究では、まず先行研究の動向を踏まえ、ニューギニア高地エンガ州において、植民地期に鎮圧された紛争が、独立(1975年)を境に復活した状況に着目した。そこで独立後の紛争が、政府の秩序維持能力の低下、市場経済の浸透、資源開発、人口増加と土地不足、銃の流入、クラン間の敵対の歴史などが織りまざって生じた複合的な現象であることを明らかにした。現地調査で紛争の再発や常態化をまのあたりにし、構造や規範中心の分析だけでは説明できない感情の動態をいかに記述・分析するかが課題として残った。

そこで次に、紛争に起因する感情を主題化し、紛争とその処理を捉えなおすことを試みた。エンガ州ではクランの内と外では紛争の顛末と、それを左右する感情のあり方が著しく異なっている。クラン間の紛争は、その発端が個人間の軋轢にあっても、クラン間の対立感情から集団規模の紛争に容易に拡大する。紛争収束には補償の支払いが不可欠だが、支払いやその額をめぐる交渉自体が競合的になされ、集団間の怒りや不満を増幅させる傾向にある。それに対して、クラン内部の紛争は、個人間にとどまり大規模化しにくい反面、そこで生じた怒りや悲しみが呪いに転化し、相手に病や死をもたらす危険性をもつ。ゆえに、紛争の当事者が怒声や泣き声をあげ、強い怒りや深い悲しみを表出させると、周囲はすぐにその激情をなだめる行動をとる。このように、クラン内外の紛争の比較から、社会的・文化的に構築された感情の動態を明らかにした。

(2) 紛争の処理と「感情の調停」

(1)を踏まえ、申請者は次に、呪いに転じうる否定的な感情が、いかに紛争処理の制度によって対処されるかを明らかにした。具体的には、仲裁と村落裁判を比較し、「いかに紛争を解決するか」ではなく、「いかに感情を調停するか」という新たな視点の有効性を示した。

具体的に、慣習的な仲裁は大勢の男性たちが広場で話し合い、紛争を収束させる方法である。クラン内の仲裁では、まずもって呪いへの配慮から、紛争の原因や責任を追及せず、当事者の怒りや不満を収めることが目指される。それに対して、独立後に国家主導で導入された村落裁判では、判事が紛争の原因や当事者の責任を徹底的に追及し、当事者の怒りや不満は抑圧される。これら仲裁と村落裁判は、怒りの表現の仕方や取り扱い方において対照的である。これらクラン内の事例を、さらにクラン間の紛争処理と比較することで、一般的な紛争解決モデルとは異なる、「感情の調停」という新たな枠組みを提示した。

以上、これまでの研究では、紛争の生起・収束から、呪いの生成・解消までの一連のプロセスにみられる感情の動態を分析し、これまで別個に扱われてきた紛争・法・宗教・感情という4つの問題系にまたがる事象を総合的に捉える枠組みを設定し、その理論的発展を図り、紛争と感情をめぐる共在の論理を主題とした論文を執筆してきた。

このアプローチを大規模紛争後社会に展開する際、従来の紛争後社会論は、新規の活動や制度の創造が、大規模紛争後の社会に顕著な特徴であることを示している。しかし、先行研究は、国家や国際 NGO・宗教団体が主導する「新しい平和事業」しか扱ってこなかった。それに対して、本研究は「平和事業」中心の視点からはこぼれ落ちる、より草の根レベルの仲裁や、土着の死生観に基づく葬送儀礼をめぐる、いかに新たな関係性や社会制度が生成し、そのなかで「過去の感情の調停」が可能となるか否かを問うてゆく。さらに、これを近年の「未来」や「希望」を扱う人類学的研究に接続し、その理論的発展を図る。

上述したように、筆者はこれまでパプアニューギニアの紛争処理を「感情の調停」という独自の視点から考察してきた。しかし、大規模な紛争後の社会（「紛争/平和」の二分法を避けつつも、殺人・破壊行為が止まった状態を便宜的にこう呼ぶ）を議論の射程に入れるには、この枠組みだけでは不十分である。「感情の調停」は、慣習的な仲裁や村落裁判といった、既存の安定した社会制度を基盤とする。だが、大規模な紛争は、それら社会制度に破壊的な影響をもたらす。それゆえ、紛争後にも残りつづける「過去の感情の調停」という枠組みは、現地の人々が（過去の社会関係を想起しながらも）破壊のなかから新たな関係性や制度を創造する点を積極的に記述・分析する未来志向のアプローチによって補完されねばならない。

確かに大規模紛争後の社会の問題は、まさに過去にあり、凄惨な事件の記憶やトラウマ、解消しがたい悲哀や憤りの持続にある。しかし、本研究はこれを「過去による束縛」ではなく、あくまで「新たな意味が生成する基点」として捉える。人々が未来へと向かうからこそ「過去の感情の調停」が必要なのであり、その実践は、破壊からの新たな関係性や制度の創造と、切り離しえない。そこで申請者は「感情の調停」という枠組みを、大規模紛争後の社会に援用して理解するうえで、近年の「未来」や「希望」を扱う人類学的研究に接続し、未来志向のアプローチの理論的発展を図ることで、従来の紛争後社会論に、理論的に貢献できると考えるに至った。

4. 研究成果

上記の目的を達成するため、ブーゲンビル州を調査地に選定した。紛争では南部のパンゲナ鉾山の利権をめぐる、パプアニューギニアからの分離独立を求めるブーゲンビル革命軍と、それを鎮圧する政府軍が対立した。ブーゲンビル州の人々は本来、隣国のソロモン諸島の人々と民族的な共通性が高い。しかし、植民地期に西欧列強によって恣意的な分割線が引かれたため、彼らはマイノリティとしてパプアニューギニア国家に組み込まれた。こうした民族の違いは対立感情を生み、紛争の火種となった。本研究では2005年に設立したブーゲンビル自治政府の分離独立の動きや、国家主導の追悼式典、それに対する人々の意見や反応を調査した。それによって、分離独立を前にしたブーゲンビル内外の民族間の繋がりや隔たりの動きを明らかにした。

また、現在、同島では NGO メラネシア・ピース財団が、チーフや村落裁判の判事を「和解の促進者」へと育成している。彼らは地元村落で、紛争時の殺人や暴力事件について調停を行う。NGO が教授するのは、外来の修復的司法である。しかし、この調停は、大多数の村人が伝統的な紛争処理に慣れ親しんでいる村落で行なわれる以上、否応なく慣習的な方法へとずらされる。だが一方で、大規模紛争下の大量殺人や過剰な暴力は、慣習的な紛争処理の方法にとって、想定外の事象である。この事象をまえに、慣習的な紛争処理も、外来の調停方式に触発されながら創発的に変化せざるをえない。これら現在進行中の変容・創造のプロセスを調査し、そこで人々がどのように過去の感情や記憶と向きあい、それがいかなる困難を伴うかを明らかにした。

加えて、大規模紛争後の社会において、「感情の調停」は紛争時に葬儀をあげられなかった戦死者の喪の問題など、紛争処理の現場を越えて広がっている。ブーゲンビル州では葬儀が非常に盛大で、多量の財を用いた一連の儀礼が10年以上にわたって行われる。しかし、紛争で大量の財が破壊され、遺体さえ戻らない戦死者が数多く出た。こうした破壊的な状況下、人々はいかに葬送儀礼を創り変え、死者の葬儀や喪を執り行い続けるのか、土着の死生観や靈魂観、ライフサイクルの時間性まで視野に入れて、通常の死者と戦死者を比較する調査を行った。そこから、葬送

儀礼の変容と新たな創造、葬儀を行うこと / 行えないことの社会的な意味づけや、死別の悲哀や憤りにかかわる文化的な論理を明らかにした。

以上の事例をふまえ、本研究では次の理論研究を行った。紛争後社会の記憶論や感情・情動研究 (e.g. Navaro-Yashin 2009 *Affective Spaces, Melancholic Objects. J R Anthropol Inst 15*) を検討し、「感情の調停」の理論をさらに精緻化・展開するとともに、未来の人類学 (e.g. Appadurai 2013 *The Future as Cultural Fact*)、土着の時間概念をあつかう時間の人類学 (Gell 1992 *The Anthropology of Time*)、人類学者自身の分析の時間的方向性を未来へと転換する「希望」論 (宮崎広和 2009 『方法としての希望』) を検討し、の理論との接合・展開を試みた。

ブーゲンビルの紛争後社会に関する先行研究は、他地域の研究と同じく、国家や NGO 主導の「平和事業」の研究に偏ってきた (Regan 2010 *Light Intervention*)。近年ようやく、現地のキリスト教活動を論じた研究 (Hermkens 2013 *Like Moses Who Led His People. Oceania 83*) が現れたが、大規模紛争後に固有の人々の葛藤に関心を払っていない。これに対し、本研究は「平和事業」中心の視点からはこぼれ落ちる、よりローカルな紛争の論理から、草の根レベルの仲裁、土着の葬送儀礼まで含めて「感情の調停」の変容と創造のプロセスを総合的に捉える枠組みを設け、それを実証的に明らかにした点で独創的である。

さらに、上記の紛争後社会における包括的な「感情の調停」という枠組みは、従来、別個に扱われてきた紛争・法・感情・宗教という4つの問題系にまたがる事象を統合的に捉えるだけでなく、紛争後社会論、暴力の人類学、未来と希望の人類学、時間の人類学、記憶論、感情の人類学の理論的知見を援用しながら、未来志向の紛争研究は可能か、という新たな問いに基づく実証的・理論的試みであった点において、広く紛争研究 / 紛争後社会研究に有用な知見をもたらした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 深川宏樹	4. 巻 1
2. 論文標題 ニューギニア高地エンガ州の縫れ合う自然と文化 環境に遍在する「水」と「心臓」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 カルチュラル・グリーン	6. 最初と最後の頁 47- 52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 深川宏樹
2. 発表標題 環太平洋地域における百科の思想序説 オセアニア島嶼部の文化と自然の関係に焦点を当てて
3. 学会等名 科学研究費補助金「イギリスロマン主義期における百科の思想と出版」研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 深川宏樹
2. 発表標題 ニューギニア高地における家社会の変貌 親族と居住をめぐる社会動態
3. 学会等名 科学研究費補助金「社会関係を開閉する食実践と住に関する文化人類学的研究」研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 深川宏樹
2. 発表標題 言葉の重みとは何か？ 「言語身体」の概念化へとむけた一考察
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究会「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 深川宏樹
2. 発表標題 死に至る言葉 ニューギニア高地の伝記的な生における諸物の因果と「言語身体」
3. 学会等名 日本オセアニア学会関西地区研究例会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 深川宏樹（前川啓治ほか著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 384
3. 書名 21世紀の文化人類学：世界の新しい捉え方	

1. 著者名 深川宏樹（岸上伸啓（編））	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 336
3. 書名 はじめて学ぶ文化人類学：人物・古典・名著からの誘い	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>リサーチマップ https://researchmap.jp/fukagawahiroki/ 兵庫県立大学研究者データベース http://kyoin.u-hyogo.ac.jp/staff/shse/fukagawa/ 兵庫県立大学環境人間学部 https://www.u-hyogo.ac.jp/shse/koho/research/researcher/index.html#02</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----